

都市の住まいの原点 団地の暮らし

私 は東京オリピックの年に生まれました。東海道新幹線が開通したりと、日本中がオリンピック景気に胸膨らませていた頃です。若かった両親も憧れだった。団地住まいを埼玉県上福岡の上野台団地で実現させ、私のヨチヨチ写真などをそれはたくさん撮ってくれています。母はいまでも、「団地の皆さんに助けてもらいながら、子育てしたものよ」と、懐かしみながら話します。もう40年もの前ですが、私も少しは覚えているんですよ。買い物に行く際などに預かってもらっていたのでしょうか。お隣



幼い頃の思い出が詰まっている 上野台団地 (埼玉県ふじみ野市)

のお宅のリビングに、きれいな絨毯が敷いてあったのを思い出します。つまり、3つ上の兄、2つ下の妹と一緒に、部屋を散らかし放題にしていた私にとつて、自宅とまるで同じ間取りなのに、シールが1つも貼りついていない筆筒の上に花が飾ってあるような光景は、非常に新鮮だったんですね。いま思うとわが家は子育ての真っ最中、リビングはまるでジャングルでしたから笑。団地というと、四角四面の建物に同じ部屋がズラリと並びイメージを持たれがちかもしれませんが、実際は一軒一軒、とても個性が出るものですね。それぞれの家族が、それぞれの夢と一緒に、工夫をしながら楽しんで生活していたように思います。団地のご近所付き合いは大変という見方もありますが、ゴミのこと、駐車場のこと、遊び場のこと、健康のこと、幼稚園や学校のことなどを、それこそ井戸端会議のように教え合い、知恵を出しながら暮らしている。だからこそ、いざというとき、「困ったときは、お互いさまよ」という言葉がかけあえるようになるのではないのでしょうか。

私の主人も団地育ちなのですが、義父は、「ここに愛着があるから」と、最後まで団地を離れませんでした。飲み

仲間や趣味仲間にも恵まれて、一人暮らしを存分に楽しんでいました。です。長いお付き合いが、近くの他人を本当の家族と変わらない、かけがえのない存在にしていくなですね。主人が戸建をプレゼントしようとしても、とうとう首を縦に振りませんでしたから。

現在、UR都市機構のほとんどの団地は、抽選なしで入居できるそうですが、団地というと抽選でなかなか当たらない、応募するのに資格が要る、提出する書類も面倒そうというイメージが残っているのかもしれない。礼金や更新料、それに保証人も要らない中には友達と一緒に住めたりと、とても借りやすくなっているのに、あまり知られていない気がします。また、一般のマンションのように自由に暮らせないんじゃないかというイメージも払拭できたらいですね。一般のマンションにも戸建の集まる住宅地にも、考えてみれば、どこにだって最低限の決まりごとがあるわけですから、窮屈に考えなくて良いんじゃないでしょうか。そ



建替事業が完了し「コンフォール上野台」に生まれ変わったエリア

れよりも、公的機関ですから、耐震やメンテナンスについて十分に配慮されているし、それでいて家賃も決して高くないしと、プラス部分に注目したいですね。私からのリクエストとしては、子育ての時に助けてもらえるサービス、高齢になつた時にも心配のない医療的なフォローなどが整っていただければ、もういいことなしです。UR都市機構は、従来からそれらの点に真剣に取り組まれているようですから、これからの団地にいつそう期待したいと思います。(談)



向井 亜紀
むかい あき
タレント

1964年埼玉県生まれ。日本女子大学在学中、ラジオ番組のDJとして人気を集め、以後テレビ、ラジオ、エッセー執筆などで幅広く活動。現在はテレビの司会、ラジオや全国での講演などで活躍中。

これからの住まい 「住宅団地の課題」

成

熟と少子化の時代を迎えた現在の日本は、暮らしに時間的「質」を求める時代に入っている。均質で万人に同じような幸せを与える空間のあり方ではなく、多様な個々の価値観に配慮する多様な空間のあり方が求められはじめています。これから住宅を求め家族を成し、生活を築きもつとしている世代は、もはや戦後の復興期の状況ではなく高度成長の真っ只中で豊かに育つた世代である。旧来のゾーニングシステムの弊害の延長にある住宅団地の単調な空間には、自分の幸福な時間の形を見つげ出すことは彼らにとつてはかなりの難問であるかもしれない。暮らしには様々な価値が輻射し、重なり合っていることが

面白さを担保してくれる。これからの住まいの姿を求めようとする、旧来の住宅団地の形式では消費者の価値観に配慮することは絶望的である。

いま、各地に残されている既存の住宅団地は、単一機能と単一世代の負の遺産を背負って瀕死の状態である。生き残っていく可能性は街としての機能の複合化を進行させ、若い世代が暮らしでも良いと考える楽しさを生み出すか、広い敷地を持つて活用することを活用して、森と庭園の住まいを生み出して他にはない魅力を生み出すことではないかと考えている。他世代が居住可能な様々な大きさと間取りのプラン、そして多くの人が自分なりの生活スタイルを楽しむことのできる様々な機能を

持った企画住戸、家族の構成の変化にあわせて柔軟に住み替えや必要面積の変化に対応できる計画、コミュニティの交流を生み出す様々な共有施設を整備することなどによって、団地の魅力は格段に高まっていく。そして団地の範囲を超えて、職住近接を可能にする業務施設の整備、商業施設、教育施設や医療施設など、地域の生活インフラも積極的に誘致することも多世代型の団地を考えていく上で非常に重要である。多世代が住まうことができるコミュニティインフラを整備していくためには、敷地の一部売却や、容積割り増しによる再開発

を行って、新たな負

担を住民にかけない形で街を蘇らせる仕組みを生み出していくことが急務である。高齢者コミュニティに新たな投資を行っていく活力を見つげ出すのは容易ではない。次世代に残していける永続するまちづくりを、環境的にも経済的にも整備して、何世代にもわたつて楽しく快適に住み続けられる街の仕組みをつくり出していくことは、UR都市機構のように長期的な視点に立つてまちづくり、国づくりを考えることのできる組織の使命であり、今後益々その重要性は増してくるにちがいない。



芝浦アイランド(東京都港区)



魅力ある歩行者空間を創出 同上



街に新しい輝きを演出した ザ ジュエールズ オブ アオヤマ(東京都港区) <いずれも光井純プロデュース>



光井 純

みつい じゅん

ペリクラーク ペリアーキテクト ジャパン代表
光井純&アソシエーツ建築設計事務所代表

1978年に東京大学建築学科卒業。82年からイェール大学大学院に進学。AIA(米国建築家協会)から学生賞およびH.I.フェルドマン賞(最優秀作品賞)を受賞し修了。シーザーペリ&アソシエーツ(米国)にて、NTT新宿本社ビル(東京)、シーホークホテル&リゾート(福岡)を担当。92年からシーザーペリ&アソシエーツ・ジャパン代表となる。社名変更に伴い、ペリクラーク ペリアーキテクト ジャパン代表として日本におけるプロジェクトを総括